
平凡転生記

浅倉 睦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平凡転生記

【Nコード】

N1033V

【作者名】

浅倉 睦月

【あらすじ】

ごくごく平凡な会社員・宮田和弘^{みやたかずひろ}。なんてことのない日に死んだ和弘は、気がつくやう赤ん坊になっていた。

特殊技能もなければ、美貌も、運動神経も、頭脳も持っていないごくごく普通の<少女>に転生してしまった和弘のほのぼの記録。

中身が男なのでほんのりBL、GL風味です。

タグのR15は可能性です。期待はしないでください。

更新は不定期。のんびりやります。初投稿です。

プロローグ

それは何とということのない日。

いつも通り会社に向かい、いつも通り仕事をこなし、いつも通りスーパーに寄って、いつも通り家路についた。

変わったことなど何一つない。そんな日に。

俺はなぜか死んでしまった。

交通事故に合いそうになった子供を助けて…その後、アパートの階段で転んで頭を打って。

…間抜けとは言ってくれるな。自分が一番感じてることだ。

まあ、起こってしまったことは仕方ないから諦めよう。

幸い俺は身寄りもないし、恋人もないし、友達もないし、仕事でも特に重要な位置にいるわけじゃないし、というよりリストラ候補だったし。

…こうして事実を羅列するとなんか泣けてくるなあ…。

俺の人生、特に面白いこともなかったけど、これで終わるんだなあ…。

プロローグ（後書き）

初めて投稿します（＾　＾）

小説自体は二次創作を何本か書いてますが完全オリジナルは中学生以来です（　＾　〇　＾　）

誤字脱字などありましたら一言どうぞ。

ご不明の点にはお答えしますが、非難や批判などは心が折れるのでお止めください。

第一話　始まりの日

階段で転んで頭を打って死亡した、間抜けな会社員・宮田和弘はふと目を覚ました。

…あれ、これ、おかしいよな。おかしいよね？

何で死んだはずなのに俺起きてるんだ？あと、なんだろうこの何とも言えない空間は…。

液体に浸かっているはずなのに苦しくないし温かくて落ち着く。

少し離れた所から音が聞こえるけど、これは…唄、か？

とても優しい声の唄が聞こえる。

どこかくすぐつたいような。とても幸せに満ちた声。

なんか俺まで幸せになれそうだな…。

…眠…、よく分らんけど取り合えず寝よう…。

俺は子守唄に似たその声を聞きながら、再び眠りについた。

そして、息苦しさを思わず目を覚ませば、そこには金色に輝く髪とサファイアの様な瞳の美人さんが俺の顔を覗き込んでいました。

…さっきからあんぎゃーとかおんぎゃーとか言ってるのって…ひよつとして…俺？

視界に入る小さな手足も…俺？

え？えええ？

「 @ ? 」
美人さんが喋る。でもその言葉は俺が聞いたことのないもので。

とりあえず…美人さんが凄く綺麗に微笑んでるので…なんかもう、
どうでもいいや…。

…現実逃避と言いたきゃ言え！

第一話〜始まりの日〜（後書き）

転生物は多いので被らないようにしたいのですが被ってたらすみません。

全部の転生物読んでるわけじゃないので…。

第二話〜そして現実を知る〜

相変わらず美人さんをはじめ、皆が何を言ってるのか分らないが、多分ここは異世界という場所になるんだろう。

だって俺、テレビでも何でもこんなカラフルな人見たことないし。何よりこの人たち魔法使うんだ。

指先からぽつと火を出したり、ふわふわ物を浮かせてみたりするし。

そして、どうやら俺は転生とかをしたみたいだ。

小さな体で喋れなくて、よくよく目も開けてられないし。

事实は小説よりも奇なり…ってこういう時に使うのかな。

俺の死因も結構あれだけど。

にこにこしながら俺に話しかけてくる美人さん。

抱かれてるってことは…多分この人が俺の母親なんだろうけど…美人だよなあ…。

こんだけ美人だと鏡見るのも楽しいだろうな。俺は平凡顔だったから鏡なんて髭剃るときくらいしか見ないけど。

上手く開けられない目で、それでも美人さんを見ていたら、部屋の（というか病室？）ドアが開いて荒い呼吸の男がはいつてきた。

青い髪に銀色の瞳のこれまた大層な男前。

…え、ひよつとして父親？

何という美男美女カップル…！

「ファグ！」

美人さんが顔を輝かせて美形さんと呼ぶ。ファグ…って名前なのかな？

「リュスカ！」

美形さんが美人さんと呼ぶ。名前だね。うん。

美人さんの腕の中の俺を見て本当に幸せそうに頬を綻ばせる美形さんに何だか少し嬉しくなった。

俺、家族とかいない施設育ちだったもんなー！

あ、捨てられたわけじゃなく親が事故で一歳の時に死んだだけだから。

俺の親もこんなに嬉しいと思ってくれたのかな（この人たちだって（多分）俺の親なんだけど）

美形さん…じゃなくて、ファグさんがリュスカさんに何度も何度もキスをする。

そして俺にも。

ちょ、待って、止めて。

親愛の情で家族愛なのは分るけど、俺女の子ともキスしたことないんだよ！？

初めてが男、父親とか嫌だ！

…幸い、頬と額で済んだけど。ああびっくりした。

感情表現が海外並みなんだな。覚えとこう。

リュスカさんから俺を受け取るとファグさんは俺の顔を見つめながら

「リース」

と言った。

…俺の、名前…かな？

何度も何度もリースと言って笑うファグさん。

まあ、悪くない名前だ。そう思った。

…それが、女の子の名前だと知るその日まで。

…俺が、女の子に転生していると知るその日まで。

第三話〜初めて知ること〜

一歳で親を亡くし、施設に育った俺はなんてことのない親子の関係、
というのがよくわからない。
いつも親のいる子が羨ましくて仕方なかった。

羨ましいとは思ってた、でもいまさら体験したかったわけじゃない
んだが…。

お腹が空いた、ということを表現するために泣くとリュスカさんが
ミルクをくれる。

…いや、あのさ、外見と立場はどうあれ三十近い男が人妻のおっぱ
い吸うとか、ないだろ？

どうにも吸えずにいたら、昔施設で俺より小さい子に使ったことの
ある哺乳瓶によく似たのが出てきたんだ。
ほっとしたねえ。なんか間男気分にならずに済んで。

…ま、シモはどうしようもなかったけどさ…。

そして、気付いてしまった。

あれとかそれとかを処理されてるときにおかしいな、と思うこと数
回。

遂に俺は知りました。

…俺が女だったことを。

分った理由は…言わずとも察してほしい。

大体さ、リュスカさんやファグさんに所謂おとぎ話とか童話とか絵本とか読んでもらったら女だって分るんだよ。

シンデレラに眠り姫、白雪姫にラプンツェル、赤ずきんに人魚姫…のような、似た感じの話ばっかなんだ。どう考えても女の子に読ませるタイプ。俺個人としてはぐりとぐらとかが好きなんだけど。

まさか女だとは思わなかったなあ…。

あ、でもこの二人の子供なら美人になるかも！美人になりたいわけじゃないけど、前みたいな平凡顔も微妙だもん。彼女いない歴〃年齢だったし。

自分が女だと認めるのは根性がいったが、まあ仕方がないと諦めた。いまさら変更できることもないわけだし。

ああ、でも、なあ？

俺が女ってことは、俺将来男と結婚したりすんの！？

…考えたくねえなあ…。

第四話 脳細胞は既に死んでいます (前書き)

今回から異世界語と日本語を書きます。

異世界語は「」で表記します。

日本語は（ ）です。

まあ、主人公が言語を解するようになったら全部「」表記で文章は日本語になるんですけども！

第四話　脳細胞は既に死んでいます

今更ではあるが、前世での俺のスペックについて語っておこうと思う。

これは一種の前置きだ。

みやたかずひろ
宮田和弘　二月六日生まれの29歳。独身。彼女なし。いたこともなし。

血液型はA型で、身長は167cm、中肉中背で中学は帰宅部。

得意科目は国語と家庭科で苦手科目は英語と歴史と地理と物理と体育と…まあ、得意なの以外。

100mは14秒くらいかかったし、長距離は苦手だし、グループ競技も個人競技も得意なのは何もない。あ、ミサンガ編むのは早かったよ？あとリリアンも。

黒髪黒眼、知力と財力により学歴は高卒（しかも定時の夜間）

料理と裁縫、編み物なんかは生きるために必要だったのでかなりのレベルだったけど、それ以外は簿記しかできません。経理一筋11年です。

定時時代はスーパーとコンビニと飲食店のバイトを掛け持ちしてました。

裏方オンリーです。

スーパーでは総菜を、コンビニでは人気のない深夜を、飲食店では皿洗いと調理をしました。

…余計な情報、多いかな？

まあ、つまり、俺が何を言いたいのかと言うと。

俺は、勉強が苦手なんだよー！ー！！

そして、現在困ってます。

どうにかこうにか聞き取りしてるけどいまちまだよくわからない。まだ1歳にもなっていないんだから言葉が分らなくてもいいけど…。

これから先ちゃんと覚えられるかな。
俺という意識の持つ脳細胞は既に死んでいるんだ。人の顔と名前覚えるの大嫌いだったし。

この国の言語がほんの少しでいいから日本語と似ててくれたらいいな。

日本語だと「これはペンです」が英語だと「これはですペン」になるだろ？

俺文法一番苦手なんだよね。日本語は兎も角。

自分が限りなく劣等生であると自覚しているので、俺はとにかく目一杯二人の会話を聞き続けた。

ヒアリング大事だって英語の先生言ってたもんな。

あと、最近心掛けてることがある。

心の中で二人、ファグさんとリュスカさんを父さんと母さんと呼ぶこと。

間違えて名前で呼んだら「反抗期だ！」とか言い出しそうなんだもん。この人たち。

ま、この世界で父さんと母さんがなんていうのかまだ分かってない

から日本語で、だけどね。

お腹も空いてないし、眠くもないし、二人は俺を見ながら話してる。これぞまさしくチャンス！

聞いてないふりで聞いとこう。

「ファグ、リースドゥアレメントディシユルクリフル」

（ファグ、リースはひいおばさんに良く似てるわ）

「デリフ、ルリースルダアリーブクルニ」

（そうだね、おじいさんが喜ぶよ）

「ミリュセニルミリュセプトドラニスルテ」

（黒髪黒眼で可愛いわ）

「アー、ミストテネビイミストリクビイミストセプトビイキルナヘルペビイラニスルテ」

（ああ、小さい鼻も小さい口も小さい目も丸い頬も可愛いな）

俺の顔をじつと見てにこやかに話す二人何言ってるのかなあ？

でも、なんかいいことみたいだし。まあいつか。

俺の顔、早く見てみたいな。

二人みたいに鼻が高くて大きい目でしゅっとした顔立ちだといいな。

第四話〜脳細胞は既に死んでいます〜（後書き）

一話ずつが短いのは仕様です。

PCが古いので良くリリースするのです（^| ^ ;）

長文書いてリリースでデータ飛んだら泣くじゃないですか（^ ^ ^）
なので一話短いです。

第五話　少し世界に慣れてきたところですよ

赤ん坊らしさってなんだろう。

どういうふうにするかと赤ん坊らしいんだろうか。

皆目見当がつかない。

この世に生を受けてもうすぐ半年が経つ。

壁に貼ってあるカレンダーらしきものを見て知ったんだけど、

この世界は時間の考え方が地球と似てる。

時計が同じだし、ひと月は大体30日だし。

助かるよな。時計の数字読めないけど。

最近じゃ寝返りも打てるようになったし、離乳食も始まった。

ぱっと見はホウレンソウとかニンジンみたいなのを摩り下ろしたの
だけど…これがなあ…美味くないんだ。味つけてないんだから当
り前だけど。

でも吐き出せない。

だってこんな美人な母親にそんなこと出来るわけないだろ！？無理
無理！

どうにかこうにか死に絶えていた脳細胞を生き返らせて言葉を学び、
呼びかけられるようになったけど…赤ん坊ってどれくらいから
喋るんだ？

まだ早いのか？

こつというのが本当に困る。

赤ん坊のおっぱい拒否からしておかしいわけだしこれからはなるべく
く怪しまれないようにしておきたいのに…。

ぐっと握った手を天に突き出せば、丸々した手とピンクにレースの

産着が見える。

うっん、女の子の服だなあ…。

ピンク…俺は青とか紺とかが好きなんだけどね。仕方ない。母さんの趣味だ。

母さんは服を作り、父さんはおもちゃを買い漁り、祖父母は本におもちゃに色々買ってくる。

母方の祖父母は揃って美形だったが、父方は祖母が平凡顔だった。ちよつと顔立ちが日本風で凄く親しみがわいた。

ちなみに父方の祖父は物凄い美形だった。思わず拝みたくなるほど神々しかった。

50近いとは思えん顔だった。あんな美形存在するんだなあと思っ

た。
初孫にめろめろになってるところは普通の祖父だったけど。

父さんには弟が（凄い美形）母さんには妹がいて（やっぱり美人）二人はもうすぐ結婚するらしい。

兄弟姉妹同士で結婚とか、狭い町なのかな。

うー、子供って飽きるなあ。基本寝てるだけだし。

柄じゃないけど身体を動かしたくて仕方がない。

自分ひとりで歩けるようになるのはいつの日か。

その日が早く来ることを願う。

第五話〜少し世界に慣れてきたところですが〜（後書き）

子供時代描き続けても仕方ないので次話から一気に飛びます。三歳くらいまで。

喋って歩けるくらいまで大きくなってくれないとつまらんですしね。ぶっちゃけ。

設定ミスを修正。

加筆修正はないです。（H23・8・26）

第六話〜可愛い妹が生まれました〜（前書き）

今回から主人公が喋ります。

普通に日本語で書きます。

第六話 可愛い妹が生まれました

ぷにぷにのて。ふわふわしててきらきらしてるきんいろのかみ。かわいくてかわいくてしかたないわたしのいもうと。

なーんて、ひらがなとかで子供っぽさを演出してみました。脳内年齢32歳です、こんにちは。

そうです、俺はもう3歳なのです。喋るし歩くし妹を可愛がることもできるのです！

ああ、麗しの妹よ！

テンションが高めなのは仕様です。

だってあんなに可愛い生き物が俺の妹なんだよ？

母さんに似た美人になると思っただよ。俺と違って。

…そうなんだよ。

動けるようになって初めて鏡を見たときに一瞬愕然としたね。

俺本当に転生したの！？ってくらい平凡顔。

今はまだ赤ん坊だからまだ「可愛い」って言ってもらえるだろうけど、大きくなったら親や祖母くらいだよ、可愛いって言ってくれるの。

美人にもなりそうもないし。ハンサムにもなりそうもない…。

父方の祖母に似たの是一目瞭然でした。

一番好きなのはあちゃんに似たのでそれはそれで嬉しかったんだけどさ。

低い鼻に小さい目。細くはないけど小さいのな。そんでもって一重。眉毛はしっかりきつちりな感じでそこだけ男前。口は小さい。黒髪

黒眼のごく一般的な日本人顔。

異世界人らしさ皆無！

自分でもびっくりするよ、本当に。

その上、所謂チート的なのはからっきしだし。

この世界では3歳の誕生日に魔法力の審査、ということをする。

その魔法力の含有量次第では小さい時から全寮制の魔法学校に入れられたりすることもあるらしい。

で、俺の魔法力はどうと…平均。すっごく普通の量。

物凄く一生懸命にやれば魔法師（魔法のみで生計を立ててる人の事）になれるかもしれないけど、なったとしても落ち零れ。その程度の力しかない。

勉強しなきゃ言葉も覚えられないし、魔法力はないし、走れば転ぶし（まあ、子供だということ差し置いても…俺はとろい）平凡顔だし…。

前の人生と違うのって性別と家族構成だけか？

家族構成が違うだけでも大分違うけど、やっぱりなにかしら特徴と
いうか欲しかったなあ…。

まあ諦めて妹を愛し守るお姉ちゃんになろう。

妹のほうが優秀になりそうな予感をひしひしと感じるけど。

「リース、今日は本読まないの？」

妹の寝顔をじっと見ていた俺に、幼馴染のケイマが話しかけてきた。

いつの間に来たんだろう。

「ん、ルーナ見てる」

「…ルーナ寝てるよ。…本読まないでルーナのいいお姉ちゃんになれないよ」

「…む、それもそーだ。じゃここで読もう。今日は何？」

ケイマは俺より二歳年上で、銀色の髪に緑の瞳の持ち主だ。

顔は何というか勿論（？）美少年で大人になったら美形になると思う。

頭が良くてしつかり者で魔法力も段違いの最強チート。

いつもにこにこ微笑んでるとか5歳児じゃないみたいだ。

ルーナのベビーベッドの横に座るとケイマが俺の横に座る。

そ、そんなにくつつかなくてもいいんじゃないだろうか。

これ中学生くらいだったら確実に誤解する距離だよな。

美少年って凄いなあ。こんなに近くでも見ても見劣りしないんだもんな。

俺のほうはなるべく見ないでほしいけど。

ケイマが俺とのちょうど真ん中に本を置く。

今日は魔法の本だ。

「魔法の力は、光、闇、水、火、風、緑、地、鋼、夢の九つからなる。全ての力は世界より借りるものであるが、それ以外にも精霊の力を借りるものもある。人には得手・不得手の力があり、全ての力を平等に使えるものは極稀である。人が持つ属性は訓練次第で増やすこともできるが、精霊の力を使うには精霊の助けが必要である」

すらすらと本を読んでいくケイマ。本当に凄いな。

俺5歳の時にこんなもん読めた覚えはないけど。天才っているもんなんだなあ。

「魔法力を増やす訓練に一番有効なのは魔法を使うことである。魔法は使えば使うほど上手く扱えるようになる。全ての人が基本的に扱えると言われる水の魔法から使ってみるのがいいだろう」

「水の魔法？どんなの？」

「ん〜…確か壺を水で満たす魔法があるよ。一番最初に習うって父さんが言ってた」

「ふうん。それ、俺もできる？」

「出来ると思うよ。リースは普通の魔法は使えるはずだし」

うん、そうだな。ケイマみたいに地面割ったり池を枯らしたりとかは俺には出来ないだろうな。

普通が一番だ。

きよろきよろと周りを見渡したらすぐ近くに小さな壺があった。何に使うものだろう。空だから丁度いいけど。

その壺に向かってケイマから教わった呪文を唱えてみる。

『水よ 我の呼び声に応え、この壺を満たせ』

RPG気分だ。

ぐっと身体から何か引きずり出される感覚。魔力を奪われてるんだ。

その感覚が終われば、魔法は終わりってことらしいけど…。覗き込んだ壺には3分の1くらいの水が。

…俺、魔法力今空っぽなのに…。

自分の力のなさが情けない。

「大丈夫だよリース。練習すればいいんだし、初めてで失敗しないで水を出せたんだ。頑張ればいいだけだよ」

「！そうだね、初めてなんだ。きっとこれからだよな」

「うん。リースは一生懸命だからすぐ上達するよ」

… 本当にケイマはいい奴だな。

こないだいい奴が親友で俺は嬉しい！

第六話〜可愛い妹が生まれました〜（後書き）

妹誕生。そして幼馴染美少年登場。

無駄にハイスペックでチートなケイマはこれからどう成長していくのでしょうか。

ちなみに魔法の属性が某乙女ゲームなのは仕様です（＾　＾　）

私は初期の鋼様が一番好きです（＾　∨　＾　）

第七話 幼馴染と進路

ケイマはもうすぐ中央に行く。

ケイマは凄くたくさん魔法力を持つてるから中央で勉強するのだ。

所謂エリートコースって奴だけど俺は心配。

だってケイマは凄く素直で可愛いんだよ!?

中央にはきつと変態も多いと思うし、攫われたりするんじゃないかって不安なんだよな。

「リース、僕必ず国家魔法師になってみせるよ」

「うん…。気をつけるんだぞ。ケイマ可愛いから変態に襲われないようにするんだ!あと、これ持ってって」

「…?これ、何?薬?」

「薬師のおばに習って作った。傷薬と風邪薬と辛子爆弾」

「辛子爆弾…?どうするの?」

「変態に襲われたらこれぶつけるんだ。そしたら怯むからその間に一番強力な魔法使ってやつつけるんだぞ。変態には容赦しじゃないけないんだ」

変態はやっつけても罪には問われないはずだ。

ケイマもルーナも可愛いから本当に俺は苦勞が絶えないよ。

「ありがとう、リース。僕頑張るよ。誰もが認めるいい男になって帰るから、そしたら結婚してね」

「…?…?…?!?!?え!?!?ええ!?!?けけけ結婚!?!?誰と誰が!?!?」

「僕とリースだよ、決まってるでしょ」

「決まってるの!?!?だって、だって、ケイマはフィリアンやシズーラやカナレにちゅーしたって、おばは言ったのに!」

「(ちゅ、おばは、余計なことを)したんじゃないよ、されたの。

大分違うでしょ?僕が結婚したいのもちゅーしたいのも全部リースだけだよ。だから僕が帰ってくるまで浮気しないでね」

「浮気！？俺の意思は！？いや、別にケイマと結婚するのが嫌なわけじゃないけど、嫌じゃないけどだからって、いやでも、そんな…」俺男だし！身体はどうあれ少なくとも心は！

大体俺がケイマくらいハイスペックだったらこんな何の特徴もない地味平凡選ばないぞ！？

能力もない、顔は平凡、性格だって地味だし、趣味は家事と薬作りだし、どこをどうしたら俺を選ぶんだ？

フィリアンはゴージャス美人になりそうだし、シズーラは清楚な美人になりそうだし、カナレは元気な美少女になると思うのに…。その3人差し置いて俺！？

「忘れないでね、リースは僕のお嫁さんになるんだから」

ふわり、舞うように優雅な仕草で頬に口付けて、茫然とした後あまりのことにシヨックで失神してしまった俺を置いて、ケイマは中央に行ってしまった。

……………まあ、あれだ、その時が来たら考えよう、うん。そうしよう。

だけど、もしも本当にケイマが帰ってきたとき、もう一度プロポーズされたら…受けるかもしれない。

だって俺に求婚するような物好き、多分世界に一人だろうから。

第七話〈幼馴染と進路〉（後書き）

最初書いてたのと方向が大分ずれました。

PCがフリーズして文章消えたんですよ！

これよりずっと長く書いたのに…。

登場から二話で退場したケイマですがまたそのうち必ず出ます。

と、どうかこの子たちいくつだ…？（自分で書いといて）

第八話　少女の日々

きらきらふわふわ、髪を靡かせて。

周りはたくさんの少女と少年に囲まれて。

優美で優雅で煌びやかな世界。

勿論、その中心にいるのは俺じゃありません。当然です。

中心にいるのは俺の可愛い妹・ルーナです。

ルーナももう7歳になりました。俺は10歳になりました。精神年齢は39歳です。

アラサーとかもうおっさん極まりないよね。

おっさんなのに外見は少女とか詐欺にも程があるよね。

一人、自分って本当に詐欺だよなあと言っていた。

そう、一人で、だ。

俺には友達がない。

寂しい奴とか言うなよ!?

ただ、どうにも子供とは気が合わないってだけだ。

俺とルーナを比較して俺を見下して、俺に話しかけてくる奴もいないし。

たまに、勝手に周りが「ルーナに嫉妬してる」とか言うけどそんなことは絶対ない。

あんなに可愛くて頭もよくて親の手伝いもきちんとする子が可愛くないわけないし、俺より愛されて当然なんだから。

別に親に区別されてるとかはない。
物凄く甘やかされてるからな、俺もルーナも関係なく。

そついう周りがいて俺は日中殆どルーナと過ごせない。
ルーナは俺と遊びたそうにしてるんだけど周りがそれを許さないんだ。

その分家では凄いわつたりなんだけど。…俺が、じゃなくてルーナが、ね。

母さん曰く昔の自分とおばさんを見る気分、だそうだ。
シスコンだったんだね、おばさん（あ、今もか）

だから暇な俺は母さんやばあちゃんに料理を習ったり、村の最年長である薬師のおばばのところ薬の勉強をしたりしてる。
編み物に裁縫、刺繍とかもするし、あとは本を読んてる。

これが結構性に合うというか…楽しい。
俺って女に向いてたのかもしれない。

今日は何作ろうかな…。

第八話　少女の日々（後書き）

ぼっちな主人公。妹は大分シスコンです。

姉も大分シスコンです。

ちよつとハブられてる主人公ですが、ぼっちが全然気にならないタイプなのでどうでもいいようです。

第九話　学校があるんだって

この国には認められたものだけが入ることのできる学校がある。

ケイマが入った魔法学校やその昔おばが通ったという薬師学校、色々な分野の学校があるけど、中で一番異質なのが良家の子女のみが通うことを許される淑女養成学校だ。

通称花嫁学校。いい旦那をゲットするための学校らしい…。

どこの世界も女の子の結婚願望って！

ああ、恐ろしい。

ところで、何でいきなりこんな話になったかというところ、村長の娘のアレニがそこに通いたいと我儘を言い出したせいだ。

俺は別にアレニと仲がいいわけじゃないからどうでも良かったんだが、俺の家がどうでも良くなかった。

俺の家は普通だけど、父方の祖父が（超絶美形の孫馬鹿だ）王家に近い、らしい。

何でもその昔、あまりに美し過ぎて国王の側室候補だったとか何とか…。

…顔がいいのも考えもんだよなあ…。

まあ、国王じゃなく周りの人間が乗り気だった話で、国王自身はいい友人だったらしいんだけども。

ちなみに、じいちゃんは元伯爵家の二男坊で、家柄の釣り合わない庶民のばあちゃんと結婚するために家を出たらしい。

男前だぜ、じいちゃん…！

で、今でも国王と親交のあるじいちゃんのコネを村長は必要としたらしいけど…。

じいちゃんは嫌がった。当たり前だよな。

それをこねてこねてこねて…じいちゃんが渋々折れた。

村八分はごめんだ、っておつきく溜息吐いて。可哀想だったからマッサージしてお茶入れてあげたら号泣しつつ喜ばれた。じいちゃん、怖い。

んで、こんだけ長々と何語ってんだ、って思うだろ？思うよね？

じいちゃんが国王様に仕方なくお願いしたら…国王様は条件を出してきた。

曰く、

「丁度、うちの孫も入るし、お前のとこの孫も入るならいいよ」

だって（じいちゃんの要約。勿論もっと国王様は厳かにお話になられたと思うよ、うん）

だから、次回から舞台が変わります。

中央の全寮制の花嫁学校に通う俺とルーナの話が始まります。

…ルーナは早いんじゃないかって？

だって、俺と離れたくないって泣くんだもん。置いてけないでしょ？

ルーナが中央に行くってんで、村の子供の九割泣いてるけど、それはどうでもいいし。

…はあ…何で俺が花嫁学校に…。

俺の夢はおばばの後を継いで薬師になることなのになあ…。
仕方ないから中央で流行ってる刺繍とかお菓子でも研究しよ。

あ…、中央行ったらケイマに会えるかなあ…？

第九話 学校があるんだって (後書き)

舞台は中央へ!

全寮制女子校での主人公の生活は波乱に満ちています (^ ^)

第十話　魔列車の車窓から

ところで、この国はエンラントリユードという国である。
国王陛下はバベル・ド・クランテ・エンラントリユード、と仰る。
ちよつとした予備情報だ。

子供と離れたがらない両親や祖父母、叔父叔母、従兄弟たちと離れ
（美形集団の群れって感じだった）泣きじゃくりルーナにまわり
つく子供たちをルーナが笑顔で懐柔し、俺とルーナは中央の都市・
グランエルに向かった。

アレニは別行動。一緒じゃなくて良かったと思うよ、本当に。

荷物は大部分既に郵送済みだから（魔法配達便、というのがあり）
持つてるものはほんの少し。

まだまだ俺より小さいルーナの手を握り、俺は魔列車に乗り込んだ。

魔列車。

魔法の力のみで動く列車。

自動ドアで空調も完璧、等級分けがあつて特級は凄いらしい。乗る
機会はないと思うけど。

俺たちが乗るのは一等級の個室。王様が切符くれたんだって。気前
いいなあ。

「えつと…4両目の3号室…。…あ、ここだ。切符をスイッチの横
に入れて…開いた開いた」

「切符ここに入れたら降りるときどうするの？」

「じ、おじいちゃんが言うには乗ってる間は客室の中にあるプレス

を付けることで、部屋の出入りが出来て、食堂車とかも使えるんだ
つて。それで、降りるときはブレスをスイッチ横に嵌めると切符が
出てきて降りれる、ってことらしいよ。良く出来てるよな。これ考
えた人凄いな」

「うふふ、そうだね。うわあ、おねえちゃんお部屋綺麗だよ」

「本当だ。流石一等級。一体いくらするんだ、この部屋…」

広さは1Kのアパートくらいあるし、それとは別にバス・トイレ完
備。ベッドルームも広くて綺麗。

ソファもテーブルも高級そうで、カーペットはふかふか。

ミニキッチンにお茶セット…おお、冷蔵庫（これまた魔法で冷やし
てるものだ）には食材が…。

これは、この旅が楽しくなりそうだ…。

俺たちが住んでいた町はカルトと言い、国でも外れのそのまた外れ、
つてくらい端にある。

魔法を使ってひとつ飛びで中央に行くのもいいけど、旅行も楽しい
よ、と王様が言ったのかどうかは知らないけど、俺たちは一週間か
けて魔列車で中央へ向かう。

こないたせりつくせりで後で何か要求されやしないか不安になる
な。

…そしてその不安は見事的中するのである。

第十話 魔列車の車窓から (後書き)

旅です。旅が好きです。

次回も魔列車からお送りします。

第十一話 魔列車探検

「どこか見てみたいところとかある？」

紅茶を飲んで一息ついたところで俺はルーナに聞いてみた。

悩む様子を見せるルーナは小首を傾げて唇を突き出して…そりゃもう可愛かった。

本当に可愛いよなあ…。俺は何があるかとルーナを守ってみせるぜ。

「食堂車行ってみたいな。食べたことないものあるかもしれないでしょ？」

「それは確かに気になるな。じゃ、行ってみようか。珍しいものがあつたら食べてみよう」

「うん！」

無邪気にはしゃぐルーナの手を握り、部屋の壁に貼ってあつた地図通りに食堂車へ向かった。

今はお昼には早く、朝には遅い時間帯なので食堂車はかなり空いていた。

多分、これが食事時だと一杯になるんだろうけど…。

十両編成の列車のせいか広い。

昔見た海外の食堂車を想わせる瀟洒な雰囲気思わずため息が漏れる。

こつこつ店が出るご飯…美味いかどうかよりも正直マナーとかのほう微妙だな。

所詮根っからの庶民だし。

「お姉ちゃん、私リクルのフェレージョ食べたい」

くいくいと手を引いたルーナに目を向けるときらきら輝く瞳に見詰められた。

リクル（日本で言うりんごに似た果物）のフレージヨ（いわゆるタルトみたいなもの）かあ…。
今はリクルの時期じゃないから中々作ってあげられないんだよね。しかしルーナはリクルが大好物なのだ。
ん…。

「お昼ごはんちゃんと食べたらずデザートに頼んでもいいよ」

「本当？私ちゃんと食べる！」

「好き嫌い駄目だよ。ピークル（ピーマンに似た野菜）もちゃんと食べれる？」

「うう…た、食べれるもん。…多分…」

「なら少し早いけどお昼にしようか」

ちらり、視線を食堂車の中に向けるとすかさず、といった感じでウエイトレスさんが近づいてくる。
流石プロだな。

「いらっしやいませ、二名様でございますか？」

「はい」

「こちらへどうぞ」

案内されたのは車両の真ん中、空いてるからいい席座れたや。ルーナには少し高い椅子だったので、俺が座らせてやる。

俺が座るより先にメニューを開くルーナに苦笑する。

俺が料理好きなせいか、ルーナはちよつと食べることが好きだ。

「私、ブルーフリ안의セットがいい」

メニューを見てさつと決める。なかなか食べる機会のない料理にしよう。

やはり視線でやってくるウェイターさんに注文する。

「ブルーフリアンのセットにラナサラダ。カルランレーナのセットで」

「かしこまりました」

ラナサラダ、と聞いてルーナが眉をひそめる。

ポテトサラダみたいなものだが、なぜかピークルが添えてあるのだ。ちなみにブルーフリアンはハンバーグみたいなもので、カルランレーナはメニユートの説明的に多分ラザニアみたいなものじゃないかな。食べたことないから分らないけど。

食べたことない料理はじっくり食べないと。レシピを盗んで家でも作れるようにするんだ。

第十一話 魔列車探検 (後書き)

なんか料理名とか材料とかすぐ忘れそう…。

そのうち普通にハンバーグ出来たよーとか言い出したら面倒になったんだと思ってください (^ー^;))

後脳内変換でハンバーグ(ベルーリアン)とか思ってください。

…次回からそうなるかもしれないので(面倒くさがりにも程がある)

第十二話　ご飯が美味しいとテンションが上がる

きよるきよると車内を見渡すルーナと俺。

行儀が悪いのは分ってるけど気になるもんは仕方がない。

そう言えば「世界の車　から」好きだったな。あれを見て旅行気分
に浸るのが好きだった。

…思えば遠くへ来たもんだ…なんてちょっとセンチメンタルになっ
てみた。

でも性格じゃないからすぐにそういうのはなくなる。

ドライな男ですよ、俺は。

そんな時、俺とルーナの視線が同じ所で留まった。

「凄い豪勢な食事だな」

「本当。あんなに一杯何人で食べるんだろうね」

「見たことない料理もある…うん、じっくり見て研究したいなあ」

「お姉ちゃんは本当にお料理が好きね」

「美味しいご飯は大事なんだよ、ルーナ。美味しいご飯を食べると
テンションは上がるし、体にもいいし、幸せになれるんだ。ご飯を
作る人は偉大だ。いつも感謝して食べないと駄目だからね」

「うん。ご飯を作ってくれた人と農家の人と漁師さんと猟師さんに
感謝しないといけないんだよね」

「そうそう。いただきますとごちそうさまでしたは大事だ。これを
ちゃんと覚えてご飯に感謝できる人はいい人だよ」

にっこりと微笑んでいるルーナは本当に可愛い。

羨はきちんとしておかないと可愛くても嫁の貰い手が限られちゃう
からね。

俺の認める男でなくばルーナは渡さん！…でもルーナが望むなら…
って、まだ七歳のルーナで何を考えてるんだか。

沢山の豪華な食事を乗せたカートを押していくウェイターさんを見送ると、まずラナサラダが出てきた。

ラナサラダはだいたい誰でも食べたことのある所謂定番メニューだ。俺は少しスパイスを効かせて作るのが好きだな。分り易く言つと少し胡椒が多めなのが好き。

「はい、二つピクルス食べることに。そしたらフェレージョ頼んであげるよ」

「うん。食べる」

取り皿にピクルスを二つ（大体一つが四分の一カットだからピーマン半分）とラナサラダを取って、しばし悩むルーナ。

意を決したようにピクルスをラナサラダを載せて…一気にぱくり。もぐもぐむぐむぐと眉根を寄せて噛み砕き、最後にごくん。

「おお、いいぞ。あと一つ、頑張れ。食べたらずデザートが待ってるぞ」

残ったピクルス二つとラナサラダを何の苦もなく食べながらルーナを応援する。

好き嫌いすると大きくなれない…かどろかは定かではないが好き嫌いはないほうがいいよな。

もう一つも同じように飲み込んだルーナは残りのラナサラダを食べ、水を飲み、口の中からピクルスの味を消したようだ。

につこり笑い、皿を俺に見せてくる。

俺も思わず微笑んで頭を撫でて褒めてあげた。

ルーナは褒めて伸びる子だよ！

「偉いぞ。ルーナはしっかりして嬉しい」

「約束だよ、デザート!」

「勿論。次の料理来たら頼もうな」

デザート一つでこんなに機嫌が良くなるなんて…。

お菓子に釣られて誘拐とかされないように俺が気をつけないとな…。

第十二話「ご飯が美味しいとテンションが上がる」（後書き）

全然話が進みません。

食べる話を書くかどうかとも話が進まないのはいつもです。

食べるのが好きなのは私です。私もピーマンは苦手です（どうしてもいい情報）

伏線を張るのってどうすればいいですか。

第十三話 もつたいないおばけが出るよ

両手に皿を持ったウエイトレスさんがこちらへやってくる。

「ブルーフリーアンセットとカルランレーナセットでございます」
にこやかに笑うウエイトレスさん。うん、ご飯が美味しく食べられ
そうだ。

「すみません、食後にリクルのフェレージョを二つ」
「かしこまりました」

ウエイトレスさんが立ち去ると、俺はまずじっくり料理を眺めてみ
た。

流石プロだな、見事な盛り付けだ。このセンスが俺には足りないん
だよな。

ルーナのブルーフリーアンセットは母さんのこぶしぐらいの大きさの
ブルーフリーアン（ハンバーグみたいなもの）と付け合わせのニンジン
（ニンジン）のグラッセとふかしたジャガ（そのものずばりじゃが
いも）と綺麗に山になつてるご飯が一つの皿に乗っている。

確か現代じゃこういうのプレートランチとか言うんじゃないかな。
良く覚えてないけど。

あと、オニーニスープ（オニオンスープ）もついでる。
食欲をそそる香りと見た目にルーナはフォークとナイフを持って目
を輝かせてる。

俺がナイフを持つまでお預け状態になつてるな、これは。
これも羨の賜物というものです。

自分の分は食べ始めてからじっくり観察しよう。

「いただきます」「いただきますーす」

切り分けたブルーフリーアンを口に運び、ぱっと顔を輝かせるルーナ。

「美味しい？」

「うん！お肉が凄く柔らかいの」

「いい肉使ってるんだろ？なあ。合挽きか、それともミーツ（牛に似た家畜（カウ、まんま牛じゃないか）の肉の事）100%か…」

「お姉ちゃんのは美味しい？」

「美味しいよ。やっぱりラザニアだった」

「？ラザニア？やっぱり？」

「ああ、こつちの話。トメト（トマト）のソースとミティ（ミルク、カウの乳）のソース、それにチーズ（これはここでもチーズなんだ）が混ざり合って一つの味になってるんだ」

「…美味しいそう！今度作って！」

「同じのが作れるように研究するよ」

ただ…これラザニアなのに皿に入ってないんだよな。直接ご飯に乗ってる…。

…あれ、これってラザニアじゃなくてドリア？でもご飯は普通だし…うっん…。

でもこの国に生まれて何がホツとしたかってほぼ食に関して現代と遜色がなかったことだよ。

白米もあれば醤油や味噌もあるし…。

日本人の心です。

寮に入ったら母さんに糠床送ってもらわないといけないな。

和やかに話しながら食事を楽しむ。

口に物入れながら喋っちゃ駄目だけど、会話を楽しむのはいいんだよ。

そんな時、視界に入った物に思わず目を見開いた。

「もったいない…！もったいないお化けが出るぞ…！」

「どうしたの、お姉ちゃん？」

「あれ、さっきどこかに持ってた料理。全然減ってないどころか殆ど手もつけずに戻ってきてる」

「本当だ、もったいないねえ。美味しそうなのに」

「全くだ。どこのお大臣か知らないけどどうかと思うよ、本当に」

どついう人間か知らないけど、食べることを大事に出来ない奴は長生きできないよ！

第十四話 出会いは突然に??

リクルのフェレージヨと紅茶でまったりのんびりした後、一旦客室に戻ることにした。

広いけどそんなに目新しいものが一杯あるわけでもないと思うからね。

どうせ長旅だ。まったりしよう。

客室の前まで来た時、何やら揉めているらしき声が聞こえた。

「嫌なの！私^{わたくし}これは食べたくないのよ！」

「そうは言われましてもお嬢様。このような車内で柳食（りゅうしよく、和食に似た食べものを総じてこう呼ぶ）は……」

どうやらお嬢様とやらが柳食以外は口にしないと言い張っているらしい。

柳食は外国から入ってきた食べ物で、この国ではあまり食べられていない。

俺は個人的に色々自分で作ってるけど。

だからさっきの店でもメニューには柳食はなかった。

柳食ねえ…。

持ち込んだ材料で作れるけど、どうしよっかな。

ふむ、と考えこもったその時。

ルーナに顔を覗き込まれた。

「お姉ちゃん、ご飯作ってあげるの？」

「まあ、作れないことはないんだけどさ。一回作ったらずっと作らなきゃいけないくなるし、この国で暮らしてるのに柳食のみ、ってわけにはいかないし。どうにか諦めてくれるといいんだけどね」

「好き嫌いしちゃ駄目だもんね」

「そういうこと」

だから、やっぱり放つところと思ったんだけど…。

いかにも執事、といった感じの人がドアを開いてこちらへ来てしまった。

ちなみに、言い忘れてたんだけど俺たちの客車の隣は特級だ。

壮年のナイスミドルとばかり、と目が合った。

…ばあちゃん以外で黒髪黒眼の人初めて見た…。

『おや、その髪と瞳は…柳国ヤナギクニの方ですか？』

『いいえ、私の曾祖母は柳国の出身なのですけれど』

多分淒く片言。

猛勉強したけど、やっぱり所詮は俺の頭なのです。

柳国っていうのはエンラントリユードの隣国に当たる淒く日本に似た国の事だ。

多分日本の江戸時代くらいの文化じゃないかな。

俺が産まれる前に死んでしまっていたけれど、ひいばあちゃんは柳国の出身だった。

技術指導でこっちに来てひいじいちゃんとお会い結婚してはあちゃんを産んだ。

機織り名人だったらしい。俺はその血を引いたせいか手先は器用だ。

『この国に柳国の色はほとんど見ませんからな。そうですか、ひいおばあさまが…』

『貴方は柳国の方ですか？』

ばあちゃんは柳国の敬語しか教えてくれなかった。

そして使うのは今が始めて…。

ちゃんと言葉通じてるといいんだけど。

『ええ、我が主とともに。…ああ、そうだ、もしや柳食の材料など持っておりませんか？お嬢様も柳国の血を引いており、柳食以外を口にしないと決めておられるのです』

『それは…宗教的なの？』

『そうです。柳日教の教えを母親から受け継いでいるのです』

柳日教は柳国で一番ポピュラーな宗教感だ。

ひいばあちゃんは違っただけ。

面倒なだけで一言で言うと、仏教みたいな感じ。不殺生を謳ってる。精進料理しか食べないという考え方でもいいと思う。

面倒だなあ全く。

第十五話 出会いは突然に？ (前書き)

新しい出会い第二弾はまだです。
というか凄く短い…。

第十五話 出会いは突然に??

執事さんの微笑みの前では嘘を吐き切れず、俺は柳食が作れると言っってしまった。

意志薄弱だとか言わないでくれ。

宗教なら仕方ないじゃないか。

柳食作れるの俺しかいないみたいだし…（食堂車の料理人さんや従者さんたちは作れないらしい）

それに次に泊まる駅で材料仕入れるって言うし…お礼もくれるって言うし（これが一番の理由）

お金はあって困るもんじゃないし。

ルーナに可愛い服買ってあげたいし。

仕方ない、限定料理人になるか。

何作るのかな。あんまり材料ないし…ご飯にわかめの味噌汁と漬物でいいか。

ご飯は食堂車から、わかめと味噌と漬物は俺の私物。

柳食の素材と料理名はまさしく日本語なので（喋る言葉は日本語じゃないのに変だよな）凄く楽だ、覚えやすくて。

ばあちゃんの餞別のにぼしを鍋に入れて出汁を取る。

塩抜きしたわかめを入れて味噌を溶く。一煮立ちしたら火を止めて完成。

ちなみに、ガスコンロが存在しないこの世界では魔力を込めた魔石で調理する。

食材の横で炎の魔石を売ってるのって凄くファンタジーだ。

俺が漬けた立派な沢庵を切る。一つつまむ。うん、美味しい。

ちなみに味噌は合わせ味噌である。

執事さん（名前はゲンノスケさんと仰るらしい。日本人か！）がにこやかにカートを押して立ち去った後、何となくルーナと二人残った味噌汁を飲んだ。

思わず同時にほっと息を出したのは所謂テンプレ的行動である。

お味噌汁にはほっとする効果があると思っただよね俺は。

第十五話 〽 出会いは突然に？ 〽 (後書き)

体調不良で熱出てます。何してんだか短くてすいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1033v/>

平凡転生記

2011年9月30日20時16分発行